

『破戒』

登場人物

丑松 1

丑松 2

丑松 3

銀之助

お志保

敬之進

牛藤村 1

牛藤村 2

総ては今、この瞬間に起きている。

今、この瞬間こそが、過去や未来も変える可能性を秘めている。

【0】

お志保

はじめまして。私は小説「破戒」に登場するお志保と言う者です。

皆さん、ご存じかと思いますが「破戒」の作者は、島崎藤村です。

随分と前に書かれた小説ですので、古く感じる所もあるかと思えます。

古さも文学的な味わいとして、受け止めていただけたら幸いです。

島崎藤村は、小諸に住んでいたことがありました。小諸での生活が「破戒」の

世界観を作ったと思います。浅間山の雄大な自然と、そこに暮らす人々の営みに、

島崎藤村は、豊かな時間の流れを感じたのだと思います。

【1】

牛藤村 1

これは過去の物語である。過去には後の時代に取りつて、反省すべき事柄も多い。

過去こそ、真実であるからであろう。島崎藤村、作「破戒」。天長節の夜。

宿直の当番であったので、教員の瀬川丑松と土屋銀之助は小学校に残った。

牛藤村 2

風間敬之進は心細く、名残惜しくなって、いつまでも去り兼ねる様子。

牛藤村 1

宿直室の時計は九時を打った。丑松は見廻りに行き、二十分ほどで帰って来た。

銀之助

おい、どうした？

敬之進

顔色が悪いですよ。

丑松 1

実は、不思議なことがあるんだ。

丑松 2

校舎を廻って運動場に行くと、誰か呼ぶ声がある。それは、僕の親父の声なんだ。

銀之助

妙なことが有るものだな。

敬之進

どんな風に呼びました？

丑松 3

丑松、丑松とつづけざまに。

敬之進

名前を？

丑松 1

確かに呼んだんです。親父の声だった。

銀之助

お父さんは西乃入《にしのいり》の牧場だろう。あんな遠くから、まさか。

丑松 2

また声が！もう一度行ってきます。

敬之進

どうも気掛かりだ。我々も行こうか。

銀之助

そうですね。

牛藤村 1

丑松は、声のする方を辿って行った。

牛藤村 2

丑松、丑松。

丑松 1

おとっさん、おとっさん。

丑松2 また声が聞える。  
銀之助 おい、大丈夫か？何も聞こえなかったぞ。  
敬之進 吾輩にも聞こえない。きつと幻聴だよ。  
銀之助 まあ、気にするな。ちよつと疲れているんだよ。  
牛藤村1 翌日の朝。丑松は父の死を知らせる電報を受けとったのである。  
牛藤村2 父は西乃入の牧場で、気性の荒い種牛に襲われ亡くなった。  
丑松、丑松、隠せ。たとえいかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと  
決つて打明けるな、  
牛藤村1 一時の感情や気の迷いで、この戒《いましめ》を破ったなら、世の中から  
捨てられたものと思え。  
牛藤村1・2 隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。  
丑松1・2・3 おとっさん、おとっさん。

【2】

牛藤村1 蓮華寺《れんげじ》では下宿を兼ねた。丑松が急に引越しを思い立ち、  
借りる事にした部屋は、蔵裏《くり》の続きにある二階の角のところ。  
牛藤村2 その窓から、飯山の町並みや小学校も見える。夕方近くに丑松は町へ出かけた。  
丑松1 本町の雑誌屋には、新着の書物を筆太に書いて張出してあった。  
丑松2 かねて新聞広告で見て、出版の日を楽しみにしていた「懺悔録」  
牛藤村1 猪子蓮太郎、著。定価も書添えた広告が目につく。  
丑松3 胸が踊るような心地がした。  
丑松1 黄色い表紙に「懺悔録」としてある本。四十銭を出して買い求めた。  
丑松2 本を抱いて下宿に帰って行く途中、学校の同僚に会った。  
銀之助 瀬川君、大層遅いじゃないか。  
牛藤村2 銀之助は、丑松から下宿を変えた話を聞いた。  
銀之助 君はよく下宿を替える人だねえ。こないだ引越したばかりじゃないか。  
牛藤村1 その時、丑松の持つて居る本が目についた。  
銀之助 「懺悔録」か。相変わらず君は猪子先生のものが好きだな。まあ君は愛読を  
通り越して崇拜だ、さぞかしました、この本の事を聞かせられることだろうなあ。  
牛藤村2 夕餐《ゆうげ》の煙は町の空をこめて、同僚の姿も黄昏がれて見えた。  
丑松3 僕は、いったい、なんの為に生きているのか。朝、起きて、食事をして、  
うろうろして、夜になれば、寝る。人を、こわがってばかりいる。  
丑松1 僕は、どんな人が偉いんだか、どんな人が悪いんだかその区別さえ、  
はつきりしない。淋しい顔をしている人が、偉そうに見えて仕方が無い。  
丑松2 可哀想だ。人間が可哀想だ。みんな可哀想だ。

丑松3 僕は、人の真似をして、憎むの軽蔑するのと騒ぎ立てていただけなんだ。実感としては、何もわからない。

丑松1 人を憎むとは、どういう気持ちか、人を軽蔑する、嫉妬するとは、どんな感じか、何もわからない。僕が実感として、わかる情緒は、可哀想という思いだけだ。

丑松2 この感情だけで、生きて来たんだ。

丑松3 僕は、可哀想に思われて仕方がないんだ。

丑松1・2 可哀想に思われて仕方がないんだ。

### 【3】

牛藤村1 丑松は下宿の畳の上に倒れて、身動きもせずに考えていた。

牛藤村2 『懺悔録』は、我は穢多なり、という文句で始めてあった。

牛藤村1 我は穢多なり。同じ人間でありながら、軽蔑される道理は無い。

牛藤村2 過去の記憶が丑松の胸の中に生き返った。

丑松1 七つ八つの頃まで、よく他の子どもにも調戲《からか》われたり、石を投げられたりした、その恐れの情がふたたび起って来た。

丑松2 朦朧《おぼろげ》ながら、小諸の向町に居た頃のことを思い出した。

丑松3 『懺悔録』を読んで、せつない苦しみを感じた。

牛藤村1・2 丑松もまた。穢多なのである。

お志保 「破戒」は「穢多」という身分の差別を主題として書かれた小説です。穢多とは、士農工商という身分の下に位置づけられていました。日本では古来より「血」が穢らわしいものとされておりましたので、生き物を屠殺し皮を剥ぐ職業も忌み嫌われていたのです。これらの職業を生業とする人々が穢多と呼ばれ、その身分は代々引き継がれていったのです。

### 【4】

丑松1 校長先生、何か御用談中じゃ、ありませんか。

牛藤村1 いえ。別に。

丑松2 実は風間さんが、御願いがあさうです。

牛藤村2 私に？何ですか。

敬之進 あの、ですね。少し。お願いしたいことがあまして。えっと。そのですね。

丑松3 そんなに遠慮しないで。

丑松1 私から伺います。風間さんのように退職となった場合には、恩給を受けさせて頂く訳に参りませんかでしょうか。

牛藤村1 無論です、そんなことは。

牛藤村2 小学校令の規則を出して御覧なさい。

丑松3 そりゃあ規則は規則ですけれど。

牛藤村1 恩給を受けられるという人は、満十五ヶ年以上在職したものに限った話です。

牛藤村2 彼は十四ヶ年と六ヶ月にしかならない。

丑松1 でも、わずか半年のことで。

牛藤村1 それを許したら際限が無い。

牛藤村2 恩給のことは諦めて養生なさい。

丑松2 どうです、貴方からも御願いしてみても、

敬之進 いえ、今の御話を伺えば。お言葉に従って、諦めるより外はないと思います。

【5】

牛藤村1 もとより銀之助は丑松の素性を知る筈がない。二人は長野の師範校に居る

頃から、気の合った友達だった。

牛藤村2 あの頃に比べると丑松は変わった。以前の快活さを失った。

銀之助 どうにも気掛かりで、蓮華寺に尋ねて行った。苔蒸《こけむ》した石の階段を

上り、落葉を掃いて居た寺男に、瀬川君はおりますか。と聞く、

寺男は蔵裏の方へ見に行った。急に声がした。

丑松1 まあ、あがりたまえ。

銀之助 見ると瀬川君が二階の障子を開けて、顔を出した。私は暗い梯子段をあがった。

牛藤村1 机の上には『懺悔録』。

銀之助 よく君は引越して歩くね。部屋は、前の下宿の方がよさそうじゃないか。

丑松2 ここの、鼠が多いのには驚いた。

銀之助 鼠？

丑松3 昨夜は枕元にも来たよ。今朝その話をしたら、奥様の言草が面白い。

丑松1 猫を飼って鼠を捕らせるより、自然に任せて養ってやるのが慈悲だ。

丑松2 食物さえ宛行《あてが》ってやれば、そんなに悪さする動物ぢゃない。

丑松3 うちの鼠は温順《おとな》しいから御覧なさい。そう言われて見ると、

少しも人を恐れない。白昼《ひるま》ですら出て遊んでいる。

銀之助 奥様という人は変った人だね。

丑松1 普通の人より宗教的などころがあるのさ。

銀之助 他にはどんな人がいるんだ？

丑松2 子坊主が一人。下女。それに庄太という寺男。

丑松1 それから、風間さんの娘で、この寺に貰われて来ている、お志保さん。

銀之助 風間さんの娘が。

丑松2 そう。お志保さんは、僕たちの来る前の年に学校を卒業した人だよ。

お志保 明治元年。天皇陛下がご誓文を出されて、我が国は近代国家の仲間入りを果たしました。士農工商の身分制度の廃止。明治4年には解放令によって穢多、非人という身分の区別も廃止されました。我が国は天皇陛下のもと、総ての国民が平等なのです。と、私は学校で教わりました。でも、本当に平等なのでしょうか？

【6】

牛藤村1 一ぜんめし、笹屋。表の障子を開けて入ると、のみくいしている二、三の客。

牛藤村2 主婦《かみさん》は流許《ながしもと》へ行ったり、竈《かまど》の前に立ったりして、忙しそうに働いていた。

丑松1 主婦《かみ》さん、何かありますか。

牛藤村1 川魚の煮《た》いたのに、豆腐の汁《つゆ》ならごわす。

丑松2 そんなら両方貰いましょう。それで一杯飲まして下さい。

敬之進 よう、めずらしい御客様が来てますね。

丑松3 風間さん、釣ですか。ちったあ釣れましたかね。

敬之進 獲物《えもの》なしサ。朝から寒い思をして、一匹も釣れない。

丑松1 とりあえず、一つ差上げましょう。

敬之進 君から盃を貰おうとは。道理で今日は釣れない訳だ。

牛藤村2 身を震わせながら、さも甘《うま》そうに地酒を飲む。

敬之進 我輩も学校を辞めてから、これという用が無いもんだから、釣などを始めた。

丑松2 この雪の中で釣れるんですか。

敬之進 素人はこれだから困る。冬はまた冬で、人の知らないところに面白味がある。

ナニ、風さえ無けりゃ、そう思った程でも無いよ。しかし、何が辛いと

言ったって、用が無くて生きて居るほど世の中に辛いことは無いね。

実は、こないだ、娘に逢いました。

丑松3 お志保さんに。

敬之進 娘の方から逢ってくれろという。もつとも、我輩もね、成るべく娘には逢わない

ようにしている。ところが何か相談したいことが有ると言うもんだから、

久し振に逢って見た。もうどうしても蓮華寺には居られない、一日も早く家へ

帰るようにしてくれ、頼む、と言う。事情を聞いて見ると無理もない。その時、

我輩も始めてあの住職の性質を知ったような訳サ。

性質と言うと？

丑松1

敬之進

よく世間には立派な人物だと言われているながら、女というものにかけて、非常に

弱い男があるものだね。蓮華寺の住職もやはりそうだろうと思うよ。娘はもう

悲いやら恐しいやらで、夜も寝られないと言う。一日も早く引取りたいが、また娘が飛込んで来て見給え。八人の親子がどうして食えよう。娘に帰れとは言われ

ない。先方が親らしい行為をしないまでも、これまで育てて貰った恩義も有る。一旦、蓮華寺の娘と成った以上は、どんな辛いことがあるうと決して家へ帰るな。そこを勤め抜くのが孝行というものだ。とまあ、無理やり娘を追立てたよ。

丑松 2 知りませんでした、お志保さんがそんな辛い思いをしていたなんて。

敬之進 吾輩は情けない父親だよ。

【7】

牛藤村 1 この大雪を衝《つ》いて、市村弁護士と蓮太郎の二人が飯山へ乗込んで来る、という噂は学校に居る丑松の耳にまで入った。

牛藤村 2 その日は宿直の当番として、丑松と銀之助は学校に居残ることに成った。

牛藤村 1 もっとも銀之助は用事が有ると出て行って、日暮になっても帰って来なかった。

牛藤村 2 蓮華寺の鐘の音が宿直室のガラス窓に響いて聞える頃、ことに烈しい胸騒ぎを覚えて、何となくお志保の身も案じられる。さまざまな想像に耽りながら、

悄然《しよんぼり》とランプの火を見つめて居るうちに……お志保が入って来た。

丑松 1 お志保さん、どうしてこんなところに。

お志保 何故、父や弟にばかり親切にして、私にはよそよそしいの。何故、優しい言葉の一つも懸けてくれないの。何故、口唇《くちびる》は言いたいことも言わないで、

堅く閉じ塞がって恐れと苦しみとで震えているの。今の私を見て。

銀之助 見給え、君があまり沈んでいるから、だから君は誤解されるんだ。

丑松 2 誤解されるとは？

銀之助 君を穢多だなんて、実に途方もないことを言う人もいる。

丑松 3 誰がそんな事を？

銀之助 僕は青年時代の悲しみということを考えると、いつも君の為に泣きたくなる。

実際、僕は君の心情を察している。君の慕っている人に就いても、僕は同情を寄せている。君から切出してくれると、およばずながら出来るだけのことは尽すよ。

牛藤村 1・2 隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。

丑松 1・2・3 おとっさん、おとっさん。

牛藤村 1 丑松は自らの叫び声で、夢から目を覚ましたのである。

【8】

牛藤村 1 月曜の朝早く校長は小学校へ出勤した。応接室の側の一間を自分の部屋と定め、毎朝授業の始まる前には、そこに閉籠《とごこも》るのが癖。

牛藤村 2 それは事務の支度をする為でもあったが、又、一つには職員達の不平と煙草の臭気《におい》とを避ける為もあった。

牛藤村1 戸を叩くものが有る。その音で、すぐに校長は勝野文平ということを知った。

校長はこうして、お気に入りの教員から報告を聞くのである。

牛藤村2 いつの間にか二人は丑松の噂を始めた。

牛藤村1 勝野君。君は今、妙なことを言ったね。どうも君の話は解りにくい。

牛藤村2 一生の名誉に関わることを、迂濶《うかつ》にはしゃべれないぢや有ませんか。

まあ、事実だとしたら瀬川君は学校にいらなくなるでしょう。

牛藤村1 誰から彼のことを聞いたのかね。

牛藤村2 妙な人から聞きました。まあ代議士にでも成ろうという位の人物ですから、

無責任なことを言う筈も有ません。

牛藤村1 代議士にでも？高柳利三郎か。

牛藤村2 まあ、そこいらです。ちよつとお耳を拝借。ヒソヒソヒソ。

牛藤村1 まさか！瀬川君が穢多だとは、夢にも思わなかった。

お志保

明治32年。1899年に島崎藤村は小諸義塾の英語教師として小諸に赴任し、

小諸で六年間暮らしました。結婚して、子も授かります。この頃からそれまでの

詩作から散文へと転回していきます。そして、小諸や千曲川一帯を描写した

「千曲川のスケッチ」を書きました。島崎藤村が「破戒」を書き始めたのも

この頃からです。藤村は小諸で何を感じ「破戒」を書き始めたのでしょうか？

## 【9】

丑松1 とある店の横手に、貼付けてある広告が目についた。

丑松2 見ると政見を発表する会で、猪子先生の名前も一緒に書き並べてあった。

丑松3 会場は法福寺、その日の午後六時から開会するとある。

丑松1 日暮れを待って、人知れず猪子先生に逢いに行こう。

牛藤村1 こう考えて、蓮華寺に戻り部屋に居ると、奥様が入って来た。

牛藤村2 こんなことになりやしないか、と私も心配していたんです。

牛藤村1 と前置をして、奥様は昨夜《ゆうべ》の出来事を話した。

丑松3 日暮れ頃、お志保さんは郵便を出すと行って出たつきり、帰って来ないとのこと。

丑松1 筆筒《たんす》の上に置いて行った手紙は奥様へ宛てたもので。

丑松2 その中には、自分一人の為に様々な迷惑を掛けるようでは、義理ある両親に申訳が無い。などと書いてあった。

牛藤村2 心配で眠りませんでしたよ。今朝早く人を見させにやりました。父親《おとつ》

さんの方へ帰って居るらしい。和尚さんだって眼が覚めましたうよ、

今度という今度は。なむあみだぶ。

牛藤村1 奥様が出て行った後、しばらく丑松は古壁によりかかって居た。

丑松3 釣りと昼寝と酒より外には働く気のない父親。



- 丑松 1 あの家へ帰ったとしても、果してこれから、お志保さんはどうなるだろう。
- 丑松 2 言うに言われぬ悲しい心地《こころもち》になった。
- 牛藤村 2 急に丑松は壁を離れた。廊下を通り抜け、蓮華寺の門を出た。
- 丑松 3 猪子先生の事を考えながら、千曲川の畔へ出た。先生に自分のことを話そう。
- 丑松 1 煙る夜の空気を浴び、やって来る人影を認めた。演説会が終ったところだ。皆、激昂したり、憤慨したりして、聴衆の群は雪を踏んでぞろぞろ帰って来る。
- 丑松 2 猪子先生の演説は深い感動を町の人々に伝えたい。
- 牛藤村 1 宿に行つて逢おう。こう考えて歩いた。表に立つて覗いて見ると、取込んだことでも有るのか人々が入り出して居る。亭主であろう男を呼留めて、蓮太郎のことを尋ねた。すると亭主の口から意外な報知《しらせ》を聞いた。
- 丑松 1・2・3 法福寺の門前で猪子先生が襲われた。
- 牛藤村 2 丑松は亭主の後について法福寺へと急いだ。
- 牛藤村 1 丑松が駈付けた時は、間に合はなかった。聞いて見ると、蓮太郎は石か何かで烈しく殴られた。何の抵抗も出来なかったらしい。血が雪の上を流れていた。
- 牛藤村 2 思わず蓮太郎の耳へ口を寄せた。
- 丑松 1・2・3 先生。先生。
- 牛藤村 1 蓮太郎の蒼《あお》ぎめた頬へ自分の頬を押し宛てて、呼んで見ても、月の光は青白く落ちて、死の思いを添えるのであった。
- 丑松 1・2・3 先生、先生。
- 牛藤村 2 そして亭主は、だらりと垂れた蓮太郎の手を胸の上に組合せた。戸板に載せ、上から外套を懸けて、宿に向けて出掛けた頃は、月も落ちかかって居た。
- 丑松 1 さくさくと音のする雪を踏んで、猪子先生の一生を考えながら行つた。
- 丑松 2 我は穢多を恥とせず。その言葉が心に浮かんだ。
- 牛藤村 1 自分は隠蔽《かく》そうとして、その為に一時《いつとき》も自分を忘れることが出来なかつた。自分で自分を欺《あざむ》いて居た。何を思い、何を煩う。
- 丑松 1・2・3 我は穢多なり。
- 丑松 3 明日、学校へ行つて打ち明けよう。教員仲間にも、生徒にも話そう。
- 牛藤村 1 丑松は新しい暁《あかつき》の近づいたことを知った。

【10】

- 牛藤村 1 学校へ行く支度をする為、丑松は朝早く蓮華寺へ戻った。朝飯の後、机に向つて進退伺を書いた。冬の朝日が射す障子を開けて、雪に包まれた町々を眺める。
- 牛藤村 2 家と家との間からは小学校の建物も、朝日をうけた。しばらく眺め入つて居たが、胸に浮んだのは『懺悔録』第一章、『我は穢多なり』と書起してあつたのを今更のように新しく感じて、告白するように繰返した。我は穢多なり。我は穢多なり。

牛藤村1 蓮華寺の山門を出て、とある町の角で、向こうから巡査に引かれて来る男に出逢

《であ》った。黒の紋付羽織、顔こそ隠して見せないが、当世風の紳士姿は、

高柳利三郎と知れた。町の人々は猪子蓮太郎を襲った犯人だと囁き合っている。

牛藤村2 学校の運動場には雪が積上げてあった。

丑松1 玄関も、廊下も、広い体操場も、楽しそうな叫び声で満ちあふれて居た。

丑松2 授業が始まるまで、あちこちと廻って歩くと、大鈴の音が響き渡った。

丑松3 湧上《わきあが》る胸の想いを制《おさ》えながら、三時間目の習字を教えた。

丑松1 午後の課目は地理と国語だった。

丑松2 五時間目には、国語の教科書の他に、習字の清書、作文の帳面、そんなものを一緒に持って教室へ入った。

丑松3 教科書に取掛り、やがていつもの半分ばかり講釈したところで本を閉じ、少し話すことが有る、と言って生徒たちを眺め渡す。

丑松1 皆さんに少し話す事があります。

丑松2 私は皆さんに、別れを告げなければなりません。

丑松3 皆さんも御存じでしょう。

丑松1 この山国に住む人々を分けて見ると、おおよそ五通りに別れて居ます。

丑松2 それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶《ぼうさん》、それからまだ外に穢多という階級があります。

丑松1 もしその穢多がこの教室へやって来て、皆さんに国語や地理を教えるとしたら、

皆さんはどう思いますか、皆さんの父親《おとつ》さんや母親《おつか》

さんは、どう思いますようか。実は、私はその卑賤《いや》しい穢多の一人です。

丑松2 どうぞ私の言うこと、よく覚えて置いて下さい。これから五年十年と経って、

皆さんが小学校時代のことを考える時に。あの教室で、先生に習ったことが有ったツケ。

丑松3 あの穢多の教員が素性を告白《うちあ》けて、別れを述べた事を思い出して

頂きたいのです。私は卑賤《いや》しい生れでも、皆さんが立派な考えを御持ち

なさるように、それを心掛けて教えた積りです。

丑松1 皆さんが御家へ御帰りに成りましたら、どうぞ父親《おとつ》さんや母親

《おつか》さんに私のことを話して下さい。今まで隠蔽《かく》して居たのは

全くすまなかつた、と言って、皆さんに告白《うちあ》けたと話して下さい。

丑松2 私は穢多です。

丑松3 不浄な人間です。

丑松1 許して下さい。

牛藤村2 教室に居る生徒は総立ちに成った。その時大鈴の音が響き渡った。

教室の戸が開いた。他の組の生徒も教師も出て来た。

牛藤村1 銀之助は職員室で、丑松のことを耳に入れ、職員室を飛出した。

銀之助 玄関を横切って、左右に馳違《はせちが》う生徒の群を分けて、高等四年の教室に行ってみると、廊下のところに校長、教師五六人、中に文平も、その他高等科の生徒が瀬川君をとりまいて居た。君、大丈夫か？と話しかけると、瀬川君は懐から進退伺いを取り出して、こう言った。

丑松 1・2・3 許してくれ給え。私は穢多です。

銀之助 君の決意はわかった。ここは任せて、帰りましたまえ。

牛藤村 2 丑松は、銀之助に促《うなが》され学校を出て行ったのである。

お志保 明治38年の4月、島崎藤村は、仕上げのすんでいない「破戒」の草稿を携え、幼い娘達や妻と共に、東京へ引越しました。上京間もない5月に三女がハシカから急性脳膜炎をわずらい亡くなります。「破戒」が完成し、自費出版されたのは明治39年3月でした。その直後の4月に次女が急性腸カタルで、6月には長女が三女と同じ経緯で亡くなります。「破戒」完成の前後、藤村は相次いで娘達を失います。父親としての藤村は、どんな想いを抱えていたのでしょうか？

## 【11】

銀之助 瀬川君はきつと、お志保さんの所に行くはずだ。

牛藤村 1 銀之助は敬之進の住居《すまい》を訪れた。友達思いの彼は心配しながら、

丑松を追って来たのであった。

銀之助 一寸伺いますが、瀬川君はこちらへ参りませんでしたか。

お志保 さつき御帰りに成ました。

銀之助 さつき？

お志保 瀬川さんは御気の毒な様子でした。私は穢多です、許してくださいと言って、出て行ってしまわれました。

銀之助 あなたも驚いたでしょう。

お志保 いいえ、前に文平さんから聞きましたから。

銀之助 勝野君から？

お志保 瀬川さんのことを、それは酷い悪口を仰いましたよ。私は、気の毒でなりません。

銀之助 ほんとに？僕は、瀬川君を貴方に助けて頂きたいと思っていますのです。

お志保 私に？

銀之助 ええ。実は、瀬川君は貴方のことを大切に思っています。彼は自分の素性を考え、到底及ばない希望《のぞみ》と。それで貴方のところに来て、今まで隠していた素性を告白《うちあ》けたのです。もし貴方に瀬川君の真情《こころもち》が解りましたら、助けてやろうという考えを持って下さることは出来ませうまいか。

お志保 もう私は、その積もりです。

銀之助 まだ近くにいる筈だ、一緒に探しましょう。

【12】

牛藤村1 丑松は、雪の中を千曲川に向かって、歩いていった。

丑松1 おとっさん。

丑松2 私は戒めを、

丑松3 破りました。

牛藤村2 丑松、丑松、隠せ。たとえいかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと決って打明けるな、

牛藤村1 一時の感情や気の迷いで、この戒《いましめ》を破ったなら、世の中から捨てられたものと思え。

丑松1 私は、世の中から捨てられる。

丑松2 生きるのが、怖い。

丑松3 世の中が、怖い。

丑松1 人間が、怖い。

丑松2 流れる血が、怖い。

丑松3 私は殺されるのですか？

丑松1 なぜ、殺されるのです？

丑松2 人間ではないからですか？

丑松3 人間とは、何ですか？

丑松1 死ぬと、どうなるのです？

丑松2 おとっさん、答えて下さい。

丑松3 おとっさん、寒い。

丑松1 独りは、寒いです。

丑松2 死んでも独りですか？

丑松3 私は、ここで……死ぬのですね。

銀之助 瀬川君！

お志保 無事でよかった。

銀之助 助けに来たよ。

丑松1 助けに？

お志保 貴方は、もう独りじゃありません。

丑松2 独りじゃない？

お志保 そうですよ。

銀之助 僕たちは、仲間じゃないか。

丑松3 ありがとう。

【13】

牛藤村2 これは過去の物語である。過去には後の時代に取り、反省すべき事柄も多い。

過去こそ、真実であるからであろう。

牛藤村1 真実とは何か、考え続ける事が、新たな未来を開くだろう。

牛藤村2 そして瀬川丑松は、仲間の助けを借り、

牛藤村1 新たな広い世界へ、踏み出していったのである。

お志保 瀬川さんや銀之助さんとの出会いが、私の生き方を変えました。

今、この瞬間を大切に、私は生きています。

おわり

原作 島崎藤村  
戯曲 黒岩力也